

# 大学教育 改革フォーラム in東海2011

## プログラム

**日時** 2011年3月12日(土) 10:00~17:50

**会場** 名古屋大学IB電子情報館・中央図書館  
(地下鉄名古屋大学駅 西地区連絡通路出入口(3番出口方面)より0分)

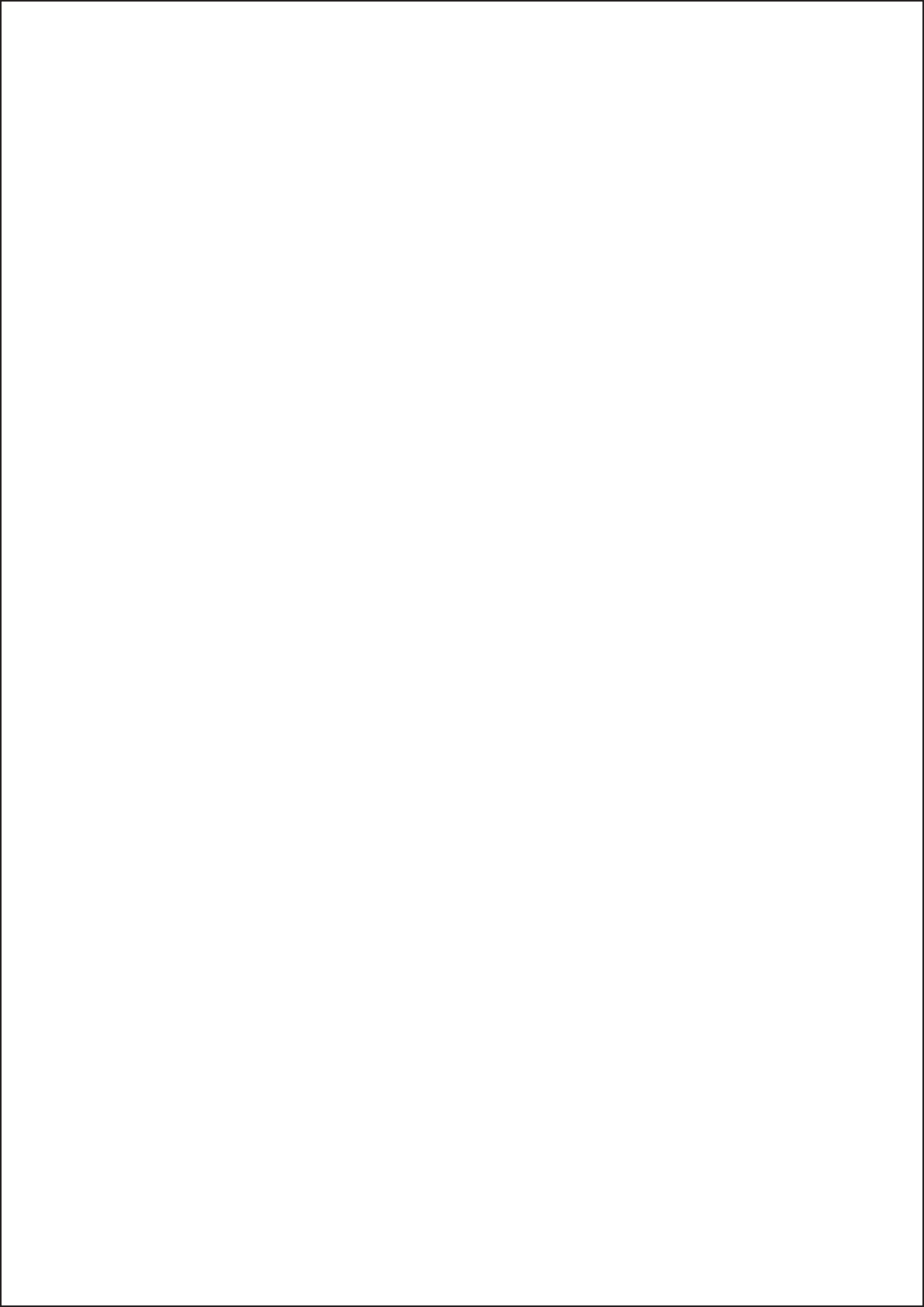
**主催** 大学教育改革フォーラム in 東海 2011 実行委員会  
FD・SDコンソーシアム名古屋

**後援** 大学行政管理学会中部・北陸地区研究会



フォーラムウェブサイト

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tf2011>



# 大学教育改革フォーラム in 東海 2011

## プログラム

日時：2011年3月12日（土）10：00～17：50

会場：名古屋大学 東山キャンパス IB 電子情報館・中央図書館

主催：大学教育改革フォーラム in 東海 2011 実行委員会

FD・SDコンソーシアム名古屋

後援：大学行政管理学会中部・北陸地区研究会



夏目達也

大学教育改革フォーラム in 東海2011 実行委員長  
(名古屋大学 高等教育研究センター 教授)

「大学教育改革フォーラムin東海2011」にご参加くださり、ありがとうございます。

「大学教育改革フォーラムin東海」は、東海地域の大学・短大等に所属する教員や職員が、一堂に会して教育改善の方策について率直に意見交換をしようという趣旨で毎年開催しているものです。

大学教育をめぐる状況は、近年厳しくなっています。とくにリーマン・ショックに端を発する経済不況の影響で、学生の就職は深刻な打撃を受けており、マスコミ等で連日大きく取り上げられています。その中で、就職支援だけでなく、大学教育や大学そのもののあり方が問われています。大学教育のあり方がこれほど世間の耳目を集めている例は、過去にもそれほど多くないはずですが、それは、高等教育への進学率の上昇とともに、大学が国民の多くにとって身近な存在になっていること、大学に対する期待が高まっていることの結果といえます。そのように考えれば、教育の改善を志す教職員にとって、現在の状況はいかに厳しくても、ある意味ではチャンスとさえいえるかも知れません。

有為な若者を社会に送り出す責任を大学は負っており、社会はその責任を的確に果たすことを大学に強く求めています。なにより、若者自身も社会に出て働けるだけの能力を獲得することを期待して、大学に入学しています。大学教育には多くの問題が絡んでおり、大学だけでは対処できない問題も少なくありません。しかし同時に、大学で対処できる、大学自身が対処すべき問題も多いことも事実です。大学で働く私たちは、自分たちのすべきことをしっかり自覚し、質の高い教育を実現して、大学としての社会的責任を果たしたいと考えています。

「大学教育改革フォーラムin東海」が、そのための議論の場となるように、実行委員会で内容を検討して参りました。昨年に引き続き、「FD・SDコンソーシアム名古屋」に加盟する中京大学、南山大学、名城大学、名古屋大学の企画・運営によるセッションを設けました。これらを含めて各セッションとも、各大学の教育実践やFD・SDの取組を行う中で課題として浮かび上がってきた問題を取り上げています。さらに今年度は、大学行政管理学会中部・北陸地区研究会のご後援をいただくことができました。この研究会は、長年にわたって大学職員の立場から大学教育改善について研究し実践してこられました。

今日一日、活発な議論を行い、明日からの実践への示唆とエネルギーを生み出せるように、ご参加のみなさまのご協力をお願いします。

## 会場へのアクセス



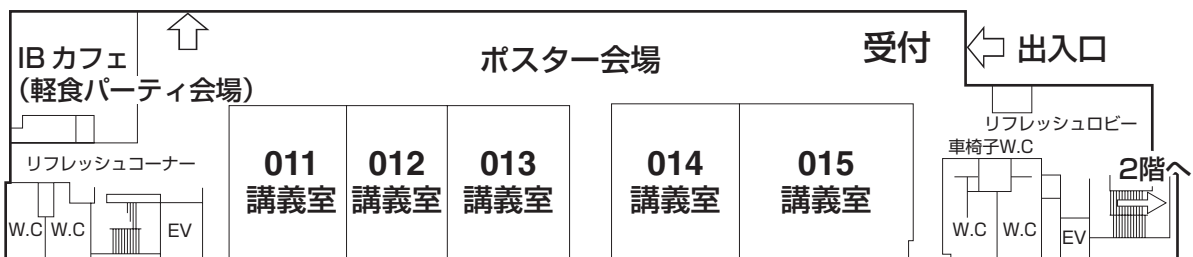
## 会場内のご案内

※館内は全面禁煙です。

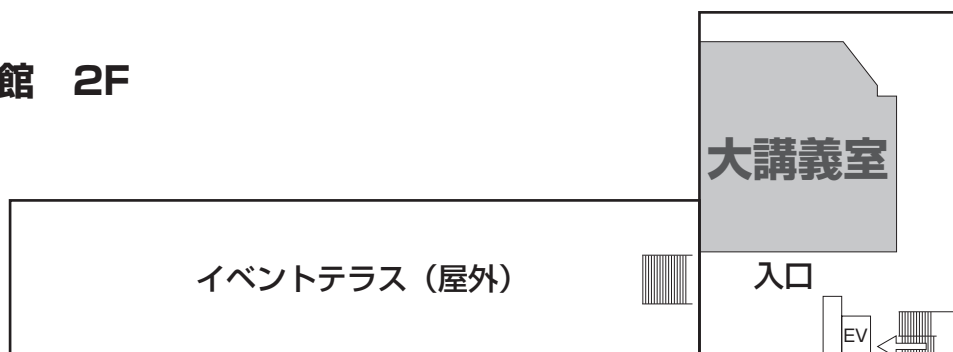
### IB 電子情報館 1F

出入口

地下鉄名古屋大学駅 西地区連絡通路へ



### IB 電子情報館 2F



## ご案内

### ポスター発表をなさる方へ

- ◎ 9：30よりポスターを掲示可能です。遅くとも12：40までに掲示してください。
- ◎ 掲示用品は事務局にてご用意しております。
- ◎ ポスターセッションは13：00～14：10（昼食時）と18：00～19：30（軽食パーティ時）です。質問への対応をよろしくお願いします。
- ◎ 軽食パーティに参加されない場合は、13：00～14：10の対応だけで結構です。
- ◎ フォーラム開催中はポスターを掲示したままで結構です。
- ◎ ポスターは19：30までに外してお持ち帰りください。事務局から後日宅配便でお送りすることもできますので、ご希望の方は受付にお申し出ください。

### 昼食・軽食パーティのご案内

- ◎ 会場でのお弁当販売はありません。北部生協食堂等をご利用ください。
- ◎ 軽食パーティーは当日受付にてお申し込みいただけます（2,000円）。ぜひご参加ください。
- ◎ お弁当などを召しあがる際は、各講義室、1階廊下のラウンジスペース、イベントテラス（2階屋外）、その他オープンスペースをご利用ください。
- ◎ 軽食パーティーはIBカフェ（ポスター会場隣）で行います。

### その他

- ◎ 下記の施設が営業しておりますので、ご利用ください。

#### 北部生協食堂

購買部（1階） 10：00～14：30

食堂（2階） 11：00～14：00

- ◎ 工学部7号館外側に自販機コーナーがありますので、ご利用ください（喫煙スペースもあります）。
- ◎ ポスター会場中央部分に自由展示コーナーを設けましたのでご利用ください。
- ◎ 余った資料等は特にご希望がない場合は事務局で処分させていただきます。宅急便でお送りすることもできますので、ご希望の方は受付にお申し出ください。
- ◎ クロークを012講義室に用意しておりますのでご利用ください。

# プログラム


10:00	<b>開会の辞</b> 山本 一良 (名古屋大学)			
10:10	<b>基調講演 「学生の学びを支援する大学改革」</b>			<b>大講義室</b>
	小笠原 正明 (筑波大学/大学教育学会長)			
11:00	休憩 (10分)			
11:10	<b>セッション 1</b> <b>014 講義室</b> <b>「地域のために 大学ができること」</b>  <b>座長</b> 栗原 裕 (愛知大学)  <b>報告者</b> 鵜飼 宏成 (愛知学院大学) 杉浦 礼子 (高田短期大学) 千頭 聡 (日本福祉大学) 水野 晶夫 (名古屋学院大学)	<b>セッション 2</b> <b>015 講義室</b> <b>「大学職員の育成 プログラムを 考える」</b>  <b>座長</b> 高木 志郎 (名城大学)  <b>報告者</b> 林 透 (北陸先端科学技術大 学院大学) 檜森 茂樹 (名城大学) 村上 孝弘 (龍谷大学)	<b>セッション 3</b> <b>013 講義室</b> <b>「『市民性』を育む 教育プログラム」</b>  <b>座長</b> 黒田 光太郎 (名城大学)  <b>報告者</b> 行本 正雄 (中部大学) 原田 正樹 (日本福祉大学) 戸田山 和久 (名古屋大学)	<b>セッション 4</b> <b>中央図書館 2 階 ラーニングcommons</b> <small>(このセッションのみ別会場です)</small>  <b>「図書館を通じた アカデミックスキル の育成」</b>  <b>座長</b> 木俣 元一 (名古屋大学)  <b>報告者</b> 塩村 耕 (名古屋大学) 紅露 剛 (南山大学)
13:00	<b>昼食</b> <b>ポスターセッション</b> <b>1 階廊下</b>			





14:10	<p><b>セッション5</b> 014 講義室</p> <p>「学生の視点から 見えてくる大学 —日本人学生、 留学生は日本の 大学をどう見て いるか」</p> <p><b>座長</b> 照本 祥敬 (中京大学)</p> <p><b>報告者</b> パネルディスカッション① 日本人学生 パネルディスカッション② 外国人留学生</p>	<p><b>セッション6</b> 015 講義室</p> <p>「大学職員研究 の現在」</p> <p><b>座長</b> 中井 俊樹 (名古屋大学)</p> <p><b>報告者</b> 西浦 明倫 (立命館大学) 上西 浩司 (鳥羽商船高等専門学校) 中島 英博 (名城大学)</p>	<p><b>セッション7</b> 013 講義室</p> <p>「文学教育の おもしろさと むずかしさ」</p> <p><b>座長</b> 日比 嘉高 (名古屋大学)</p> <p><b>報告者</b> 高木 信 (相模女子大学) 竹内 瑞穂 (愛知淑徳大学) 西原 志保 (名古屋大学)</p>	<p><b>セッション8</b> 011 講義室</p> <p>「大学教育の中の 大学博物館」</p> <p><b>座長</b> 高橋 貴 (愛知大学)</p> <p><b>報告者</b> 黒沢 浩 (南山大学) 吉田 英一 (名古屋大学) 緒方 泉 (九州産業大学)</p>
15:50	休憩 (10分)			
16:00	<p><b>パネルディスカッション</b> <b>大講義室</b> 「大学におけるキャリア教育の課題と可能性」</p> <p>司 会 夏目 達也 (名古屋大学)</p> <p>パネリスト 飯吉 弘子 (大阪市立大学) 犬飼 齊 (名城大学) 加藤 容子 (椋山女学園大学)</p>			
18:00	<p><b>軽食パーティー</b> <b>IBカフェ</b></p> <p><b>ポスターセッション</b> <b>1階廊下</b></p>			





基調  
講演

大講義室

10:10~11:00

## 学生の学びを支援する大学改革

小笠原 正明 (筑波大学/大学教育学会長)

### ■ 小笠原 正明 (おがさわら まさあき) 先生ご略歴

盛岡市出身。北海道大学 (工学博士)

専門領域 (研究対象) は、放射線化学、高等教育、科学技術教育、大学史。

1968年 北海道大学大学院理学研究科化学専攻修士課程修了

1968年 北海道大学助手 (工学部)

1974年 北海道大学講師 (同上)

1974年~1976年 文部省在外研究員としてアメリカのウェイン州立大学博士研究員

1979年 北海道大学助教授 (工学部)

1980年 ポーランドのウッチ工科大学准教授

1984年 スウェーデンのスツーツビク研究所客員研究員

1992年 北海道教育大学教授 (函館校)

1995年 北海道大学教授 (高等教育機能開発総合センター)

2000年~2006年 北海道大学 高等教育機能開発総合センター 高等教育開発研究部長

2006年 東京農工大学教授 (大学教育センター)

2008年 筑波大学特任教授 (~現在)

[受賞] 1993年10月 第3回日本放射線化学会賞受賞

### ■ 学会および社会活動等

- ・ 日本放射線化学会理事 (1977年4月~1979年3月)
- ・ 大学入試センター運営委員 (2000年4月~2001年3月)
- ・ 国土審議会専門委員 (2001年10月~2005年12月)
- ・ 財団法人北海道科学・産業技術総合振興センター ホクサイテック財団研究開発支援事業審査委員会委員 (2001年6月~2006年3月)
- ・ 大学教育学会理事 (2002年7月~2003年6月)
- ・ 大学教育学会常任理事 (2003年7月~)
- ・ 高等教育学会理事 (2003年5月~2007年4月)
- ・ 財団法人大学基準協会「特色ある教育支援プログラム」実施委員会委員 (2003年4月~2008年3月)
- ・ 大学設置・学校法人審議会特別委員 (大学設置分科会) (2006年5月~2008年3月)
- ・ 独立行政法人日本学術振興会質の高い大学教育等推進事業委員会委員 (2006年4月~2007年3月)
- ・ 大学教育学会会長 (2009年6月~)

### ■ 現在の研究課題

- ・ 大学における理系基礎教育の開発、組織化
- ・ 大学におけるファカルティ・デベロップメントの在り方
- ・ 教育評価の方法 など

## ■ 講演内容の紹介

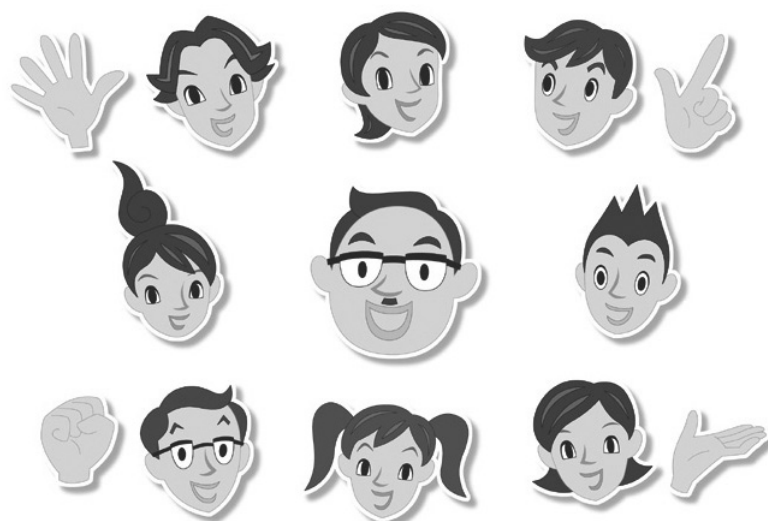
「ユニバーサル・アクセス」段階に達した我が国の大学の一番大きな問題は、学生が主体的な学びの習慣を身につけていないことだろう。授業には良く出る、90分という長い講義でもおとなしく聴いている、宿題を出せばやってこないわけではない。しかし、大学生として何かが足りない、と多くの人が感じている。この直感は授業外の学習時間の調査などでも裏付けられている。しかしそのようなデータを見なくても、例えば、シンガポール大学やUCバークリーのキャンパスに入った時に感じる、何とも言えない明るさや活気と比較するだけで、何が欠けているかすぐ分かる。世界の大学における学びは、テクノロジーの進歩と価値観の転換によって、ダイナミックに変わりつつある。我が国において18歳世代の何パーセントが大学に進もうと、このままでは高等教育として意味がない。「ユニバーサル・アクセス」段階の高等教育は、単に進学率の数字の大きさを意味しているわけではない。

しかし、アクティブラーニング化の掛け声だけで事態が一挙に改善されるわけではない。この問題には、少なくとも以下の5点が関係している。

- 1) 学生編成や教員組織などの組織的な問題
- 2) 適切なコースワークの実現を妨げているカリキュラムの構造的な問題
- 3) アクティブラーニングを実現するためのコンテンツ開発
- 4) 双方向性を実現するための教授法の開発
- 5) 自学自習のためのインフラ整備

上の1)と2)には、ディシプリンの自律性だけでは解決できない問題が含まれている。教授会のみならずその大学のトップマネジメントの力量、引いては国の大学政策が大きな影響を与える。3)では、ディシプリンの内実とディシプリン間の関係が進歩の鍵となる。つまりは、それぞれの大学の〈学問の質〉が問われることになる。そして4)と5)には個々の教員の力量だけでなく、学生の学びを支援する組織力が関係してくる。この5つの側面に対して、〈持続する志〉を持って地道に働きかけることが、大学の教育を改善する唯一の道だと思う。

この講演では、最初に大学における学びの世界的な変化について触れたあと、過去3年間にわたって筑波大学で行われた「現代人のための科学」という教養科目の開発の過程で、コンテンツ開発、アクティブラーニングの導入、自学自習のインフラの整備等において具体的にどのような問題が生じたかを説明し、合わせて今後の大学における学びに必要な支援の内容について述べたい。



## 1

## 地域のために大学ができること

座長：栗原 裕（愛知大学 経済学部）

大学は地域に、経済的効果（学生の流入、研究成果、産業振興に資する事業等）、政治・政策的効果（自治体の政策ブレイク、実現等）、文化振興（生涯学習の機会、地域行事や活動への参加等）をはじめ、種々の役割を果たす。アクティブラーニング等の効果もある。

地域との関係を深化させたい、地域の発展に貢献したい気持ちは確実に存在しよう。しかし、大学は、地域に拠点をおきながら、垣根を越えた知的活動をも目的とする。地域の利害や理念と相克することもある。両者に発生するのは共感ばかりとも限らない。時間の経過により、関心事や大切にもの、当初の目的が異なってくることもある。

地域と大学の関係を参加者とともに考えたい。

## 1

## 各種のコミュニティと連携したアントレプレナーシップ教育の実践から

報告者：鵜飼 宏成（愛知学院大学 経営学部）

地域とはそもそも一様にとらえることは難しい。関わろうとする者の目的で範囲が異なってくるからだ。私は、大学で、産学官民連携で新規事業開発を通じたアントレプレナー教育を実践している。教育実践にあたっての連携は、コミュニティ間の連携ととらえている。そして、コミュニティの種類により地域の範囲が拡大も縮小もする。

コミュニティ間の連携という場合、「汗をかくのは誰か？」が意識されないことが多い。位相の違い、時間感覚の違いはコミュニティの種類が違えば当たり前存在する。これを放置したのでは、事は起こらない。大学は研究者、学生問わずプロ野球でいえば「育成枠」であって完成されていない。連携は保育器（インキュベータ）と考え、共に育つ視点を大学と関わるコミュニティは意識してほしい。

私は、未来をデザインし、位相の違いを理解し、プロジェクトを推進するインキュベーション・マネージャーであることを意識している。これが、大学内の汗をかくスタッフの一つの姿ではないか。

## 2

## 地域に求められる人材育成の取り組み

報告者：杉浦 礼子（高田短期大学 オフィス情報学科）

地方に拠点をおく短期大学が地域や学生に必要とされ続けられる「地域短期大学」として存続するためには、大学経営にマーケティング手法を導入する必要がある。本報告では、学生や教員、カリキュラムなどを統制可能要因の一つであるproduct（製品）として捉えることの意義を報告する。また、短期大学の顧客の一翼である地域企業が「短期大学に求めている人材育成ニーズとはどのようなものであるか」を把握するため実施した独自調査結果を紹介しつつ、本学の人材育成の取り組みを報告する。

### 3

## 大学と地域との連携・共育

報告者：千頭 聡（日本福祉大学 大学院国際社会開発研究科）

大学と地域との連携の必要性が指摘され始めて、ずいぶん時間が経過している。大学の立場からみると、研究対象として地域社会をとらえるだけではなく、社会との関係性が希薄な現代の学生を、4年間どう教育し、市民として社会に送り出していくのか、という課題がある。一方で、地域自治の現場では、地方分権から地域主権、市民主権へと流れが大きく変化してきたが、では、市民主権を支える地域の人財は十分に育っているのだろうか、という課題があり、大学が果たす役割は小さくないと考えられる。ここでは、共育、すなわち学生と地域とがともに育ちあう関係性を築くにはどうしたらよいかを、筆者の経験から述べたい。

### 4

## 実践教育を通じた地域活性化

報告者：水野 晶夫（名古屋学院大学 経済学部）

名古屋学院大学では、まちづくりサークルによる商店街活性化・社会貢献活動を2001年より開始。シャッター通りであった商店街は、2006年、経済産業省「がんばる商店街77選」に選定されるまで活性化。2007年度名古屋市熱田区に3学部移転後は、日比野商店街活性化、熱田のまちづくり施策に参画。商店街は名古屋で唯一の3年連続組合員数通増商店街に。他方、学生は主体的な取組と成功体験によって、実践力をアップ。

これまで大学の社会貢献スタイルは公開講座が一般的であったが、実践教育を通じた地域活性化という新しいアプローチを早くから実践し、成果を上げてきた。そこで、これらの活動を維持してきたシステムを紹介する。



## 大学職員の育成プログラムを考える

座長：高木 志郎（名城大学 大学教育開発センター）

近年、大学を取り巻く環境の変化を受けて、大学職員のあり方が問われています。従来、職員は、管理業務及び教育研究における補助業務を担う者と位置づけられていました。昨今、グローバル化を求められる高等教育の状況のなかで、大学は国際化とともに経営改革に迫られ、今までの管理業務及び教育研究に関わる業務で得られるレベル以上のものが求められています。このため、平成20年度に全学的なSD（職員の能力開発）を実施した大学は、9割といわれ（中央教育審議会大学分科会第93回（H22.12.14開催）資料）、その内容は従来の当該大学の研修だけでなく、大学間連携を活用した事例など、多種多様な形で展開されています。

本セッションでは、個別大学や大学間連携の取り組みに加え、大学の枠を超えた職員の有志による自主的な取り組みについても報告を受けます。多種多様な取り組みを学び、報告者と参加者の意見交換を通じて、大学職員のあり方について示唆を得ることをねらいとします。

### 1 地域ネットワークによる大学職員育成

1

報告者：林 透（北陸先端科学技術大学院大学 大学院教育イニシアティブセンター / 大学コンソーシアム石川 SD 企画委員会）

勤務先での本務を抱えながら、地域ネットワークでの活動に関与することは誰しも負担と考えることが多いと思う。私自身、ふとしたきっかけから大学コンソーシアム石川での活動に参画する機会を得ることで、その活動範囲が広がり、現在では自ら企画実施する立場を与えていただくに至っている。

一大学での取組とはやや性格を異にする地域ネットワークを通じた大学職員育成プログラムへのニーズや企画設計のあり方・課題について、これまでの実経験を踏まえながら報告を行い、参加者の皆さんと情報共有・情報交流できれば幸いである。

2

### 2 名城大学の職員育成プログラムの現状と将来に向けての期待

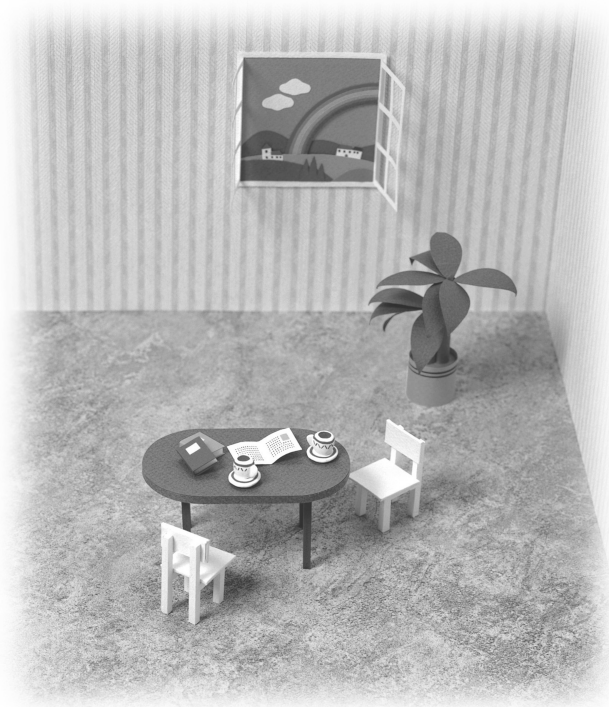
報告者：檜森 茂樹（学校法人名城大学 経営本部総務部）

名城大学では平成14年度より事務職員研修制度（階層別・テーマ別・指名公募・自己啓発）を確立し体系的に実施している。そんな中、ここ最近、特に力を入れているのは平成19年度より実施している「若手職員研修3年プロジェクト」である。本研修は入職3年目までの事務職員を対象とし、現場では得られない「考える機会」としている。広い視野で大学全体の課題を見出す力を養い、また大学で働くにあたり大切なものの一つである愛校心の醸成を中心に実施し、名城大学の将来に向けて必要な事務職員を育成している。

本報告では、この若手職員研修を中心に名城大学の育成プログラムの現状を紹介し、中堅職員（報告者）自らが考える今後に向けての職員育成プログラムを示していきたい。

これらを踏まえ、参加者の皆様と共に新しい大学職員の育成プログラムを開発していく『価値ある機会』としたい。

「高等教育研究会」は、1994年の「京都・大学センター」（現在の「大学コンソーシアム京都」）の発足と前後して、京都の大学人を中心として結成された団体であり、様々な分野における大学間連携を模索した取り組みをこれまで行ってきた。同様に、『大学職員ジャーナル』の刊行を中心とした「大学職員フォーラム」の活動も、大学間の垣根を越えて大学職員の現場の経験知を普遍化することを一つの課題としてきた。その取り組みは90年代以降の大学職員論の「嚆矢」として一定の評価を得て、現在に至っている。これまでの取り組みを概括し、大学職員論の一つの系譜を再認識する契機としたい。



## 『市民性』を育む教育プログラム

座長：黒田 光太郎（名城大学 学長室）

21世紀になり10年が経過しました。日本において20世紀と明らかに違うことは、地球環境問題の深刻化、少子高齢化社会の進行、経済のグローバル化の深化などによって、地球環境の持続性そして人類の生存そのものが危うくなってきたのではないかと考える人が確実に増えてきたことではないでしょうか。こうした危機的状況ともいえるわれわれの未来をどのように切り拓いていけばいいのでしょうか。21世紀に求められる「市民性」を育む教育にその可能性を見出せないかと期待して本セッションを企画しました。

## 1

### 『持続学のすすめ』による実践型人材育成

報告者：行本 正雄（中部大学 工学部）

本取組は、工学部、応用生物学部、生命健康科学部、国際関係学部、人文学部におけるあてになる人間の人物像と資質を明確にして、持続学のすすめによる文理融合型教育課程カリキュラムを構築し、文系・理系の教員が連携した指導体制と評価手法を開発するものである。このカリキュラムの教養課程において社会に目を向けた教養の必要性を理解させる持続学のすすめによる基礎・実践教育を新設し、専門課程ではこれまでに実践してきた様々な持続可能な社会の課題探求型プロジェクトに取組む。産官学民の協働を通じた人間力や社会力の育成のための共通的な評価とポートフォリオを整備する。

## 2

### 協働型サービスラーニングと学びの拠点形成の取り組み

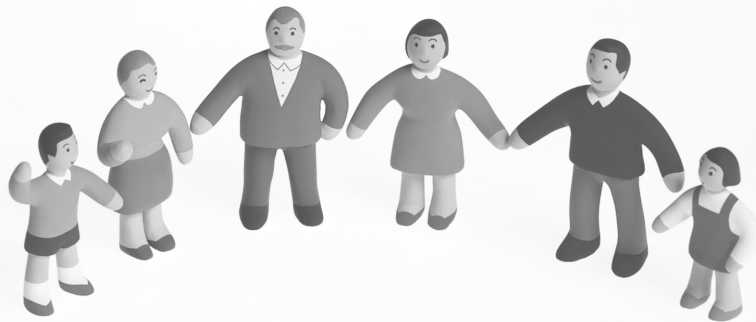
報告者：原田 正樹（日本福祉大学 サービスラーニングセンター／社会福祉学部）

本学社会福祉学部は教育GPとして「協働型サービスラーニングと学びの拠点形成」にむけた取り組みを3年間してきた。社会福祉学部では3年次以降、社会福祉士など国家試験取得のための専門実習等がカリキュラムに位置づけられるが、初年次教育と専門教育をつなぐ「2年次」にサービスラーニングを導入することで、学生の市民性を豊かに育みたいというねらいである。

知多半島には50以上のNPOが組織化され、非常に活発な取り組みをしている。背景には中間支援組織である「NPO法人地域福祉サポートちた」の存在が大きい。本プログラムではこの団体とパートナーシップを結び、協働型プログラムを展開してきた。この3年間の取り組みと課題について報告したい。



人類の持続可能性が切実な課題として叫ばれるようになってきた21世紀に即応した教養教育＝市民性をはぐくむ教育を構想するにあたっては、(1) その「新しい時代」に必要とされる能力や態度を取り込む形で「教養」とは何かが再定義されること、(2) 一方で、どのように再定義されるにせよ、それが伝統的に「教養」と呼ばれてきたものと本質を共有し、連続したものであること、の2点が重要でしょう。本発表では、筆者が市民性をはぐくむ（教養）教育において教養はいかに最定義されるべきかを明らかにした上で、名古屋大学情報文化学部での、新しい教養教育の立ち上げを目指した新科目「人類生存のための科学」の試行錯誤について紹介します。



## 図書館を通じた アカデミックスキルの育成

座長：木俣 元一（名古屋大学 高等教育研究センター）

学生が大学にいる間に図書館を使いこなせるようになることは、学習や研究を進めるために役立つだけではない。社会に出てからこそ必要となる、継続して成長していく力、すなわち自分で学んで考える力を養ってくれる。図書館を活用することで、学生が自ら育っていき、主体的に学ぶ環境を整えることもできる。大学図書館は無数の可能性を秘めている。こうした可能性を図書館から引き出す活用法は、教員と図書館員が連携を取ることで初めて有効となる。このセッションがこうした連携のきっかけになればと願っている。

## 1

### 古書の心を次世代へ

報告者：塩村 耕（名古屋大学 大学院文学研究科）

大学が存在する社会的意義、もっと大げさにいうと文明史的な意義は、タスキを繋ぐ駅伝選手の如く、昔から伝えられてきた学問研究の方法を、次の世代に直接伝えてゆくことにある。われわれの日本古典文学研究の分野では、たとえば古典籍の取り扱いや、古文献の読解と価値判断などが、伝えてゆくべきスキルに相当する。それは、いわばモノに即した技術だから、必ずしも教室での講義形式には適さない。この点について、名古屋大学附属図書館および西尾市岩瀬文庫をフィールドに、学生、図書館職員、一般市民を対象とした実践例を報告し、その面白さと悩ましさを共有していただこうと思う。

## 2

### 情報リテラシーをどう伝えるか：図書館の現場から

報告者：紅露 剛（南山大学図書館）

図書館の現場でレファレンス業務を担当している者の立場から、日頃、図書館利用者の情報リテラシー教育に関して感じていること、考えていることについて語らせていただきます。当日は、所属の南山大学名古屋図書館で実際に担当している図書館利用講習会を題材に、効果的な情報リテラシー教育をするための日々の工夫、学生に教育する情報探索スキルのうちで重要な事柄、また、レファレンス・カウンターで学生と接していて気づくこと等について、ざっくばらんにお話をさせていただく予定です。

P1

## 「四国地区大学教職員能力開発ネットワーク」による大学の教育力向上

発表者：大竹 奈津子（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室）  
米澤 慎二（愛媛大学 経営企画部 人事課）

四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD: Shikoku Professional and Organizational Development Network in Higher Education）は、先般法令で定められたFDの義務化や、大学を取り巻く環境の変化に対応できる職員育成の重要性を踏まえつつ、四国地区の高等教育機関（全33加盟校）において、学生の豊かな学びと成長を支援する、実践的力量をもった高等教育のプロフェッショナルを輩出することを目指している。本報告では、円滑なネットワーク運営を維持するための効率的かつ効果的な仕組みや、取り組みの中核となる全加盟校の教職協働によるFD/SDプログラムの開発と実施について、これまでの実績と成果から報告を行う。

P2

## 関西大学の教育改善を支える学生スタッフ

発表者：竹中 喜一（関西大学 教育開発支援センター）

本学では、2006年度より授業支援SA（Student Assistant）、2009年度よりLA（Learning Assistant）と呼ばれる学生スタッフを起用している。授業支援SAは主に教員の授業運営支援、LAは主に初年次教育（スタディスキル科目）のアクティブ・ラーニング促進を目的としている。本発表では2つの取組について業務内容や研修・育成方法等を紹介する。また、実践から生じた成果や課題についても報告する。

P3

## 大阪大学附属図書館ラーニング・コモンズにおけるライティング講習の実践報告

発表者：堀 一成（大阪大学 大学教育実践センター）  
赤井 規晃（大阪大学 附属図書館 利用支援課）

図書館における学習支援の試みとして、大阪大学ではラーニング・コモンズにおいてレポート・論文の書き方・文献の読み方講座を開催した。2010年の本フォーラムでは、ラーニング・コモンズにおける基礎セミナー授業の事例を紹介したが、今回は短期自由参加のライティングサポート講習会を開催した事例を紹介する。

特に2010年12月に実施した論文の書き方講習会は、受講者の持ち寄った論文アウトラインに対し講師が改良法を提案し、学生自らの力で推敲していく形式をとった。講師は教員と図書館職員が協働して担当した。本件はラーニング・コモンズ活用教育の事例提供でもあり、SD実践の事例提供でもあると自負している。

P4

## 智のパラダイム創生のためのイグナイト(IGNITE)教育

発表者：中越 元子 (いわき明星大学 薬学部)  
野原 幸男 (いわき明星大学 薬学部)  
松本 司 (いわき明星大学 薬学部)  
村田 和子 (いわき明星大学 薬学部)  
山崎 洋次 (いわき明星大学 薬学部)

いわき明星大学薬学部の学士課程教育は、論理的な思考力と問題解決能力および患者志向型医療における幅広いコミュニケーション能力を身につけた地域社会に貢献できるクスリの専門家の育成を目指している。その基盤的総合教育であるイグナイト教育は、学生を知のパラダイムから知恵(智)のパラダイムへ導くためのものである。初年次から3年半に渡る体系的な本教育は、学生の潜在能力を引き出し、論理的思考力やコミュニケーション能力などを順次身につけ、主体的に、論理的かつ着実に学び続けることができる学士力の基盤創りを目的としている。今回は、この体系的な教育課程に基づく本教育の学習成果についてCBT、OSCEの結果も含め報告する。

P5

## 受講生の意見・考えを知るためのクリッカーとポータルを活用

発表者：青野 透 (金沢大学 大学教育開発・支援センター)  
松尾 理恵 (KEEPAD JAPAN(株))

受講前知識、授業内容理解度、および前回授業内容記憶度など、教員が知りたい(知っておくべき)受講生情報を確認するためのクリッカー活用が広がりつつある。リアルタイムの情報把握により、授業内容や方法をフレキシブルに変更でき、変更結果が理解度向上につながる事が確かめられることから、確信のもとに1人でできる授業改善手段として一定の有用性を持つ。加えて、学生たちがポータル活用で示す「他の受講生の考えを知る事」についての関心の高さから、クリッカーを、受講生の賛否・意見表明のきっかけとし、受講生にとって最も知りたい事柄がなんであるかを探り出し、学生の学習意欲を高めることに用いることを提案する。

P6

## 国立大学法人Aにおける組織機構改革について ～組織行動学からの検証～

発表者：伊奈 経雄 (北陸先端科学技術大学院大学 教育研究戦略機構)

国立大学法人は、平成16年4月の法人化以降、自らの裁量により管理運営組織を設計することが可能となった。こうした管理運営組織の改革における一つの傾向として、理事の業務執行機能を実質化するため、一元的な事務機構を解体し、それぞれの理事の下に支援組織を形成する動きがあり、地方国立大学法人Aにおいても、平成22年4月にこれと同様の組織機構改革が実施された。

本報告は、A大学における組織機構改革について、組織行動学の視点から検証を加え、改革を組織開発に資するものとするための諸条件と課題について考察するものである。

**P7**

## 筑波大学春日ラーニングコモンズ—学生主体の活動と学習の場

発表者：逸村 裕（筑波大学 大学院図書館情報メディア研究科）  
池内 淳（筑波大学 大学院図書館情報メディア研究科）  
呑海 沙織（筑波大学 大学院図書館情報メディア研究科）

2010年4月、筑波大学図書館情報学図書館内に移転した春日ラーニングコモンズ（KLC: Kasuga Learning Commons）は図書館員や教員の支援を受け、学生が主体となって活動を行っている。

KLCの活動は二種類に分かれる。ひとつは学生が主体となって、内外の人的ネットワークとtwitter、Ustream等の情報ネットワークを活用した勉強会、ワークショップ、イベント活動である。他方はチューターと呼ばれる学生スタッフを平日に配置し、講義演習に関連する学生からの質問・相談に答え、それを教員にフィードバックすることである。今回は後者を中心に、2010年4月から2011年1月にかけて、KLCに寄せられた質問内容及び回答記録をもとに分析を行い報告する。

**P8**

## 英語カウンセリング・ルーム(E-ナビ)による体系的な授業支援

発表者：松本 佳穂子（東海大学 外国語教育センター）

東海大学湘南キャンパスに学ぶ約22,000人の学生に対して、英語の授業に関するきめ細かな学習支援を行うためにカウンセリング・ルーム「E-ナビ」を本年度設立した。主に必修科目で学ぶ1、2年生約11,000人を体系的に支援するシステムを目指し、日曜日を除く毎日、教員2名、TA1名（教員とTAは交代制）、職員2名の体制で学生の相談、補習、自習に対応している。半年間試行を重ねながら、学生のプロフィール化、TAによるe-ラーニング指導、授業との連携の効率化を進めてきた。今年度の成果と今後の課題について、利用実績と傾向、学生のアンケート及びインタビュー結果、成績の伸びなどを含めて報告する。

**P9**

## 大学図書館におけるラーニング・コモンズの現状とその特徴

発表者：小山 憲司（日本大学 文理学部）

近年、日本の多くの大学図書館において、ラーニング・コモンズと呼ばれる、コンピュータが利用できるグループ学習空間の設置が広がりつつある。こうした施設・サービスは、同じ名称を共有しているものの、その中身は大学によって異なる。逆に、ラーニング・コモンズという名称を用いていないが、それと同等のサービスを展開する大学もある。ラーニング・コモンズという潮流が大学図書館員の間で定着しつつあるなか、国内の大学図書館に設置された、あるいは大学図書館が関与したラーニング・コモンズについてアンケート調査を実施し、その現状を明らかにすることを試みた。本発表では、その結果および補足調査によって得られた知見を報告する。

P10

## リーフレットで伝える「レポートの書き方」 —<Master of Writing>の開発と活用—

発表者：久保田 祐歌（立教大学 大学教育開発・支援センター）

立教大学大学教育開発・支援センターでは、学生にレポート等の書き方を伝えるリーフレット<Master of Writing>を作成し、全学向けに提供している。本リーフレットは、学生の書く力の向上に資するという学習支援の役割に加えて、教員がレポートの書き方を指導する際の教材にもなるというFDの機能も果たしている。冊子体ではなく、リーフレットという形態をとることによって、コンテンツを随時増やしたり改訂することが可能となる等の利点を得ている。

本発表では、(1)企画の経緯と作成の体制、(2)内容、(3)開発のプロセス、(4)頒布の方法、(5)活用と利用者(学生・教員)の反応、(6)開発の過程で得られた知見等を報告する。

P11

## 「リベラルアーツカフェ～静岡の教養～」の展開

発表者：藤井 基貴（静岡大学 教育学部）

宮田 舞（東京大学大学院）

松原 央達（静岡大学大学院）

リベラルアーツカフェは「専門家と市民」、「科学と社会」の双方向コミュニケーションを目指す静岡版サイエンスカフェです。幅広い分野についての語らいの場として、静岡市内のカフェを中心に定期的に開催されています。運営スタッフには大学教員、学校教員、学生、地元企業の社会人が参加し、地域に根ざしたノンフォーマルな「学びの場」づくりを進めています。今年度は科学技術振興機構（JST）や大学ネットワーク静岡から助成をいただき、新たな活動を展開してきました。本発表ではカフェの基本理念、今年度の取り組み、NPO法人化も含めた今後の展望を紹介させていただきます。来場者のみなさんから多くの助言をいただければと思っております。

**P12**

## 大学教育改革の観点からみた学習空間の再検討について

発表者：加藤 彰一 (三重大学 大学院工学研究科建築学専攻)  
毛利 志保 (三重大学 大学院工学研究科建築学専攻)  
ハサウネ ファヘッド (三重大学 大学院工学研究科建築学専攻)  
柴山 依子 (三重大学 大学院工学研究科建築学専攻)  
長澤 多代 (三重大学 高等教育創造開発センター)

PBL教育には教室の革新的な計画・設計が必要であるという立場から、三重大学学部1年のPBL授業を対象に調査研究を行った。学生の行動を把握するため、ビデオ撮影による観察調査を行った結果、教室のレイアウトは十分ではないが、すべての参加グループにおいて均等に、学生たちは効果的なコラボレーション行動を行っていることが判明した。PBL用の教室では、一斉授業から円滑にグループワークへと展開するフレキシビリティが必要であり、グループ単位のコミュニケーションを促進するに十分な空間構成と、教室内における学生の移動を容易とする動線軸の確保が必要である。

**P13**

## 大学における自校教育—「理念」普及の視点から—

発表者：中島 由起子 (河合塾 教育研究部)

少子化やグローバル化、機能分化、特色化、質保証などへの対応が求められる近年、各大学に固有の「理念」の重要性が増している。そして各大学固有の「理念」は、目指す人材像を実現するためカリキュラムとして学生に提示され、毎回の授業内容に具体化されることで、学生の学びの中で実践されている。とくに入学者を自校学生とするための初年次教育や、キャリア教育、インターシップの事前学習などに際して、自校教育の要素を取り入れる大学が増加している。そのような現況を踏まえ、本研究では、自校の「理念」を学内に普及させるための有力な枠組としての自校教育に注目し、先進事例を分析するものとする。

**P14**

## 授業改善を学生の学習に繋げる教育システム —タイム・マネジメントの視点—

発表者：中村 章二 (愛知教育大学)

大学改革の下、教育の質を向上させるため、FD活動が盛んに行われている。しかし、様々な工夫により、授業を充実した結果、目的である「学生の自主的な学び」は実現しているだろうか。かつてエリートであった大学生は全入時代を迎え、大きく変わってきたが、各大学の教育システムは、それらに対応して変化しているだろうか。

学生指導に長く関わってきた大学職員としての経験と桜美林大学大学院修了後の研究活動を基に、初年次教育、キャリア教育導入における留意点を中心に学生生活全般を見渡したタイム・マネジメントの視点から、教育の質を保证する学生を学びに誘う教育システムを提案する。

P15

## クリッカーによる授業内アンケート —匿名性に注目して—

発表者：岡田 圭二（愛知大学 短期大学部）  
龍 昌治（愛知大学 短期大学部）  
佐藤 嘉能（キーパッド・ジャパン株式会社）

心理学の授業にて、講義で紹介される人間行動や意識と学生自身の行動や意識の同違が話題になる。従来、このような同違に注目してアンケートを行うと、学生が本心や実状を回答しにくいという声をよく聞く。しかし、クリッカーを用いることにより、学生がその本心や実状を気楽に回答できる効果が期待される。そこで、クリッカーによる回答において、学生はどの程度、匿名性を感じているのであろうかを調査した。その調査結果とクリッカーを用いた心理学の授業について紹介する。

P16

## 大衆化した大学における就職支援上の課題

発表者：池田 暁生（愛知東邦大学 就職課）

愛知県内のある私立大学で学生の就職支援を担当する部署で勤務している。日々の学生との関わりの中から、学生の就職に対する考え方に問題を感じている。就職活動を積極的にする学生と、就職活動を積極的にしない学生の二極化の問題である。特に積極的に就職活動をしない学生を問題に感じている。学生の大半が就職を希望しているが、就職ガイダンスへの参加が少なく、またカリキュラム内に配置されている就職に関連する科目を履修する学生が少ない。学生が就職を希望しているのに就職活動を積極的にしない学生に大学はどのように取り組むかを明らかにしたい。

P17

## 短期大学におけるキャリア形成支援 —リベラルアーツ系短期大学を中心に—

発表者：松崎 久美（南山短期大学）

大学のキャリア教育、キャリア形成支援は、注目されているが、短期大学のキャリア形成支援についてはあまり語られていない。しかし、短期大学は就職、大学編入学、専門学校、留学などの多様なキャリア形成を支援する場となっている。また、たった2年間で、学生のキャリア形成を支援しなくてはならない。そうした短期大学生に対するキャリア形成支援の現状と課題について、事例を交えながら紹介する。



P18

## 大学教育の「考え方」を問い直す —「学問」の実験的利用の試み—

発表者：木田 歩（南山大学 人類学研究所）  
山崎 剛（南山大学 人類学研究所）

人が学び成長するのは、どんな時だろう？まだ知らなかった知識が増えた時だろうか。それとも、よく知っていたことを分かり直すような経験をした時だろうか。私たちは、これまで「人類学」という方法を使い、「分かる」ということを問題にしながら、人が学び成長することがどのようなことなのかを探求してきた。

大学とは、ただ知識を増やすだけではなく、自明な物事にあらためて気づいたり、共同的に新たな理解が生まれたりする場である。

このポスター発表では、講義による知識の伝達とは異なる、大学教育のうちにある可能性のひとつとして、私たちがこれまで取り組んできた大学博物館での展示やワークショップの活動を紹介する。

P19

## 大学博物館における博学連携の実践 —名城大学附属高校との連携授業

発表者：黒沢 浩（南山大学 人文学部）

南山大学人類学博物館では、名城大学附属高校の国際クラスとの連携授業を実施してきた。このクラスには「日本文化」と「異文化理解」という授業があり、そこで南山大学人類学博物館所蔵資料を活用しようと試みている。

博物館が学校教育に関わることの意味は、博物館ならではの活動に学校での授業をリンクさせることではないかと考えている。しかし、その方法についてはまだまだ試行錯誤の段階にあり、毎回のように反省を繰り返しながら、どのようにしたら高校生に対して印象に残るような授業ができるのかを考えている。今回の報告では、そうした試行錯誤の過程を紹介したい。

P20

## 現場触発型教育・学習による就業力の育成

発表者：宮崎 信二（名城大学 経営学部）

講義・ゼミ・企業実態調査の三位一体の学習を通して、職業人としての資質を養成し、社会的・職業的自立を可能とする素養を形成します。中心はゼミ教育であり、基礎ゼミではキャリア形成導入教育、専門ゼミでは現場触発型教育・学習及び研究発表を展開します。並行して、経営学全般に係る入門科目を充実し、専門分野を選択し、簿記や国際フィールドワーク等の実務実習関連科目を配置しています。このように座学と実習科目の両面から経営学を学び、学生の将来展望・キャリア形成に対する意識を高め、体系的な学知・技法の学修の深化を動機づけ、自立的な就業力を育成します。

P21

## 学生の主体的な学びの方法論について考えるFD

発表者：堀口 朝示（名城大学 大学教育開発センター）  
楯 一也（名城大学 大学教育開発センター）  
大武 貞光（名城大学 大学教育開発センター）  
谷田 朱（名城大学 大学教育開発センター）

名城大学では、教育改善の知恵と工夫を共有する場として、FD委員会や大学教育開発センターを中心にFD活動を推進している。平成21・22年度のFD活動方針として「学生の主体的な学びを促すための、教育活動の探求・実践および蓄積を目指したFD環境構築」と定め、今年度は、学生の主体的な学びの方法論について考えるFD活動を推進してきた。

本発表では、これまでの名城大学のFD活動を「学生の主体的な学びの方法論について考えるFD」という視点で捉えなおし、授業アンケートのデータなどから見えてくる学生の学びの現状や、学生の主体的な学びを促す授業づくりの取り組み、FDの課題について考察する。

P22

## 名古屋大学における物理演示実験の開発 —効果的な物理演示実験の導入法

発表者：安田 淳一郎（名城大学 学長室）  
千代 勝実（名古屋大学 教養教育院）  
中村 泰之（名古屋大学 大学院情報科学研究科）  
小西 哲郎（名古屋大学 大学院理学研究科）  
齋藤 芳子（名古屋大学 高等教育研究センター）  
三浦 裕一（名古屋大学 大学院理学研究科）

講義において学生に理論と現象を整合させ、科学の抽象的な概念を理解させる手法の1つとして、「演示実験」が普及している。大学での物理演示実験教材は、国外では米国のPIRA等の組織によって共有が進められている。一方で国内では、大学での演示実験教材の共有が進められた事例は多くない。そこで、我々は平成21年度より、名大の有志教員を中心に「物理学講義実験研究会」を組織している。今年度は、学内教員への質問紙調査や、演示実験の開発を通じて得られた知見をまとめたウェブサイトの開設を目指している。本発表では、本研究会の2年目の活動の全体像を報告し、「効果的な物理演示実験の導入法」等について説明する。

**P23**

## 大規模大学における学士力向上にむけた就職支援の充実

発表者：犬飼 齊（名城大学 キャリアセンター）  
大竹 純平（名城大学 キャリアセンター）

本取組は、広く社会の人々から信頼される「学士」にふさわしい人材を輩出するために、大学の教養教育、専門教育と相俟って、就職支援の充実を図り、学生の就職力向上に資する取組みを総合的、有機的に組み合わせ、多角的に実施することで、一人でも多くの学生に意欲や主体性を持たせつつ、社会で活躍するための力である社会人基礎力を身につけさせるとともに、よりよい進路・職業選択ができるようにすることを目的とする。

**P24**

## FDとしての教員メンタープログラム

発表者：中井 俊樹（名古屋大学 高等教育研究センター）  
伊藤 奈賀子（鹿児島大学 教育センター）

赴任間もない新任教員にとって、大学における活動に不安はつきものである。名古屋大学では、新任教員が大学教員として成長していくことを支援することを目的として、大学において一定の職務経験をもつ教員と交流する教員メンタープログラムを実施している。新任教員研修でメンティ教員を呼びかけたり、教員メンタープログラムが円滑に実施されるようにメンター教員のためのガイドやメンティ教員のためのガイドを作成してきた。本報告では、教員メンタープログラムの開発の過程で得られた知見をふまえて、教員メンタープログラムのFDとしての可能性を検討する。

**P25**

## 名古屋大学における物理演示実験の開発 —慣性モーメントの定量的な理解

発表者：三浦 裕一（名古屋大学 大学院理学研究科）  
千代 勝実（名古屋大学 教養教育院）  
中村 泰之（名古屋大学 大学院情報科学研究科）  
小西 哲郎（名古屋大学 大学院理学研究科）  
齋藤 芳子（名古屋大学 高等教育研究センター）  
安田 淳一郎（名城大学 学長室）

名古屋大学の初年次の物理の授業において、物理的な概念を学生に理解させるため、授業中に行う実験を開発している。学生が現実の問題に法則を適用して問題を解くためには、加速度や慣性モーメントなどの基本的な概念を理解していることが必要である。これまでの経験によれば、回転運動は直線運動に比べて理解され難い傾向がある。これまで各種の回転体を斜面で転がし、その速度から慣性モーメントの概念を定性的に掴む実験を導入し、教育効果を高めることができた。今回は、それをさらに進めて、その定量性も理解できるような実験教材を開発したので、報告する。

P26

## 名古屋大学における男女共同参画の取り組み ～仕事と育児の両立支援を中心に～

発表者：榊原 千鶴（名古屋大学 男女共同参画室）

2003年に設置された名古屋大学男女共同参画室は、現在、子育て支援、ポジティブ・アクション、女子学生エンカレッジ、産学官連携などの事業に取り組んでいます。なかでも仕事と育児の両立支援については、2006年の東山地区「こすもす保育園」開園以降、2009年には同園の拡張と鶴舞地区「あすなろ保育園」の新設、さらに、常設としては全国初となる大学内学童保育所「ポピンズアフタースクール」を開校し、子育て中の女性研究者がキャリアを継続できるよう、全学を挙げて支援体制を整備しつつあります。

今回の発表では、こうした名古屋大学の取組を、近隣の大学の方々にも参考にさせていただけるよう、具体的な事例とともにご紹介します。

P27

## ライティング・サポート in ラーニング・コモンズ ～空間・人・資料～

発表者：栗野 容子（名古屋大学 附属図書館）  
増田 晃一（名古屋大学 附属図書館）  
黒柳 裕子（名古屋大学 附属図書館）  
安福 奈美（名古屋大学 附属図書館）

名古屋大学中央図書館の2階フロアがラーニング・コモンズとしてオープンして1年がすぎた。PC利用や学生同士の議論や共同作業などの多様な学習ニーズと学習形態に対応した新しい学習の場として活用されており利用者数が増えた。学習支援の一つとして、図書館と学内組織とが連携した講習会の開催など、レポートや論文作成のためのライティング・サポートを開始した。場所・資料・人的支援の三面から行うライティング・サポートの取り組みの現状とこれからの報告する。

P28

## 日本と中国の初年次教育の比較研究

発表者：呉 曉霞（名古屋大学 大学院教育発達科学研究科）

本発表では、2010年の夏に中国で調査した中国の初年次教育について報告する。南京大学の初年次教育の内容、実施方法、経年変化などをとりあげ、日本の大学との相違点を比較する。

**P29**

## 科学・技術教育を真ん中に置いた高大接続 —愛知工業大学名電高等学校の場合—

発表者：内海 那保子（名古屋大学 大学院教育発達科学研究科）

中央教育審議会の報告にもあるように、社会・職業への移行の最終段階である後期中等教育・高等教育段階のキャリア教育・職業教育は、社会的・職業的自立や社会・職業への円滑な移行を果たすためにも大変重要である。

愛知工業大学は、創立以来一貫して技術者の育成を目指してきた。現在、附属の愛知工業大学名電高等学校は同大学と協力して、科学・技術教育を中核とした「高大接続」を追求している。同高校から愛工大への進学は特別な受験準備を要しない点を生かして、従来の枠にとらわれない新たな高大接続の取り組みを目指している。その具体的な今後の課題を、中核教科である「先端科学技術入門」等の紹介・分析を通して明らかにする。

**P30**

## スマートフォン、タッチタブレットを活用した教育の情報化

発表者：伊藤 一成（青山学院大学 社会情報学部）

近年、モバイルラーニングの研究が再燃している。その理由の一つにiデバイス(iPhone, iPad)の登場がある。筆者の所属する学部は、2009年5月全国に先駆けて学生および教員全員にスマートフォンを配布した。従前の電子端末にはない機能性により、教育の場にもこのようなスマートフォンやタブレットが浸透するのも時間の問題となってきた。また2015年には本国で約5千万人がスマートフォンを所有するという報告がある。2011年度より幾つかの大学で大規模なタブレットの教育利活用も予定されている。従前からある利活用事例ではなく、来るモバイルネット社会を見据えた教育の情報化を考える。

**P31**

## 地方の小規模私立大学が生き残る条件と方策とは何か？

発表者：原田 幸子（名古屋大学 大学院教育発達科学研究科）

大学進学率の上昇とともに都市部の大規模大学の学部や学科の増設により、地方の小規模私立大学は厳しい条件下での経営を余儀なくされている。その現状の中で財政困難な状況を凌ぎつつ、大学の特性と教職員の様々な創造と努力で、地方での使命感と存在価値を保ちながら地域の連携とともに必要とされる個性豊かな教育機関として発展する大学がある。そうした大学の経営のポイントやアイデアはどこにあるのだろうか。経営の指針や主眼、リーダーシップの所在は他大学とどう違うのだろうか。大学を捉える様々な観点から、経営と財政そして地域連携に焦点を当てた分析を試み、大学教育の質の向上と大学の将来や継続性に繋げる方策を探ってみる。

## 学生の視点から見えてくる大学

### —日本人学生、留学生は日本の大学をどう見ているか

座長：照本 祥敬（中京大学 国際教養学部）

昨年のフォーラムでは、ネイティブ教員の視点を軸に、日本の大学（学部）教育の特性や課題等について考えるセッションを企画しました。今回は、留学生を交えた〈学生の視点〉という角度から、日本の大学の「日常」を検証してみようと考えています。

〈学生の視点〉から大学のありようを探ることで、わたしたち教職員がさほど意識していないような大学生活全般にかかわるようなことから—例えば、正規のカリキュラム・デザインだけにとどまらない、さまざまな課外活動へのサポート態勢に関するニーズや評価、「大学の国際化」時代にふさわしい多様な学生の相互交流の促進に関するアイデア、大学の「内と外」との往還、より広く学生の社会参加と学びの支援にかかわるニーズなどが浮き上がってくるものと期待できます。あわせて、こうしたかれらの声に接することで、学生のニーズをたいせつにするFD活動のあり方について考える（現在までのとりくみを検証する）機会の一つにもしたいと思っています。

#### パネルディスカッション ①

報告者：日本人学生

#### パネルディスカッション ②

報告者：外国人留学生



## 大学職員研究の現在

座長：中井 俊樹（名古屋大学 高等教育研究センター）

大学における大学職員の役割は、近年注目を集めています。さまざまな学会や研究会などで大学職員に関する研究発表が行われています。また、スタッフディベロップメントという用語も定着しつつあり、大学職員を対象とした研修も大学内外で精力的に進められています。そして、大学職員にどのような能力が求められるか、そしてその能力はどのように開発されるのかについて明らかにされてきています。

本セッションでは、大学職員の能力開発に関して実践のみならず研究としても関わっている3名の報告者から話題提供していただき、会場の参加者とともに議論したいと考えています。

## 1

### 私立大学における教職協働に関する一考察

報告者：西浦 明倫（立命館大学 総合理工学院企画課）

近年の大学審議会答申は、事務組織に焦点を当て、教員と職員による協働の重要性や、大学改革における事務組織の積極的役割と専門性の向上について言及している。また、金子（2008）は、「教員の従属的立場での補助的業務」から「教員のイコール・パートナーとしての専門的業務」へと職員の役割と機能が変化していると述べている。しかし、なぜ同一組織で働く者が共通の目標に向かって働く働き方を、敢えて「協働」という言葉を用いて表現するのか。また、役割が異なる教員と職員は、どのように協働すれば効果的に成果を生み出すことができるのか。以上2点が、本研究を始めるに至った問題意識である。

本報告では、報告者の勤務校である立命館大学の事例を調査して明らかになった「教職協働を高度化させる要因」について発表する。なお、本報告は名古屋大学教育発達科学研究科博士課程前期課程での研究を基に行う。

## 2

### 『教務のQ&A』作成の試み

報告者：上西 浩司（鳥羽商船高等専門学校）

2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」ではFDと並んで大学職員のSDが取り上げられている。これは、大学職員の専門性の向上が日本の大学改革、とりわけ現在喫緊の課題となっている学士課程教育の構築にとって不可欠であるとの認識に基づいている。それでは学士課程教育に深く関わる教務分野はどうであろうか。筆者の2010年に行った調査によれば、教務担当職員の継続従事年数が長い、関連部門内を異動する組織の教務事務責任者は大学職員の「専門」の一分野として教務事務をとらえているということができた。今後の課題の一つは、まだ黎明期と思われる、「専門」としての教務事務の確立のための体系的に編まれた教務事務の標準テキストの作成であろう。

当日は専門としての教務事務の確立の試みとして名古屋SD研究会のワーキンググループが作成した『教務のQ&A』について作成の経緯や課題などを発表する。

### 3

## 大学職員の能力開発における課長職の役割

報告者：中島 英博（名城大学 大学院大学・学校づくり研究科）

長年、企業現場を観察しながら、ホワイトカラーの熟達化を研究してきたLombardo and Eichingerは、ある分野のエキスパートとしての専門性は、7割が仕事を通じて、2割が感銘を受けた上司を通じて、1割が研修を通じて開発されると指摘をしている。しかしながら、大学職員の場合は「SDイコール研修」という枠組みでの議論は蓄積されてきたものの、ホワイトカラー人材育成の基本である、職場における職務を通じた育成に関する知見が十分に発信されてこなかった。

本報告では、部下の育成や職場環境の醸成において高い評価を持つ課長職を対象とした定性的調査の結果に基づき、大学職員の能力開発において、課長職が職場において果たすべき役割を明らかにする。





## 文学教育のおもしろさとむずかしさ

座長：日比 嘉高（名古屋大学 大学院文学研究科）

教材やカリキュラムに制約のある高等学校までの国語の授業とは異なり、大学における言語・文学関連科目の授業設計は自由です。文学教育においても、教材、研究法、授業法など各々さまざまに展開し得ます。しかしその自由さの中で、教員は自らの専門性の追求と学生への伝達＝教育の狭間で思い悩み、学生は自明であった「文学」の「常識」を見失って右往左往します。大学における大学全体のカリキュラム内での位置づけ・価値づけとのすりあわせの問題もあります。文学教育の困難さも、おもしろさも、可能性も、これらのバランスの中にあるのでしょうか。会場での議論の中から、より魅力のある文学教育のあり方を探ります。

## 1

### 「語り手」を探して

報告者：高木 信（相模女子大学 学芸学部）

Cocco「強く働き者たち」（1997年）が物語構造がいわゆる英雄譚を脱構築したのとなっていることを示し、そのうちそのような構造の物語を産み出している「語り手」について考察する。すると複数の語り手の可能性が浮かび上がってくる。語り手をどの水準に設定するかによって物語内容が変化していく。このような大学での授業と、たとえば芥川龍之介「羅生門」の語り手による最後の言葉「下人の行方は誰も知らない」の高校での「教え方」とを比較し、そこから大学そして高校での文学教育の可能性を考えてみたい。

## 2

### 文学教育と文化研究

報告者：竹内 瑞穂（愛知淑徳大学 文学部）

文学を通じて、近代の文化や歴史という問題を考える。このようなテーマのもと、本年度は「変態」概念の変転に焦点を当てて、講義を行ってみました。そこで提示した、文学という〈芸術〉が、実は様々な差別を再生産しかねない、文化的な〈政治性〉をはらんでいるという観点は、漠然と文学の価値を信じてきた学生たちに、様々な反応を引き起こしました。本報告では、文化研究的な立場からの文学教育が与える効果と、その限界についての考察を試みたいと思います。

### 3

## シラバス調査からみる文学教育

報告者：西原 志保（名古屋大学 高等教育研究センター）

文学系の講座では、カリキュラムの全体像が見えにくく、基礎的な調査も行われていないのが現状です。カリキュラムは学部改組などのためにますます複雑になりつつあります。

そこで本報告では、東海地区の大学における、文学系講座・研究室の専門科目についてシラバス調査を行います。教材（作品名）と授業目的を分類し、学部全体の目的やカリキュラムとの関連について考察しました。大まかな傾向をとらえることで、理想的な文学教育のあり方を模索します。



## 大学教育の中の大学博物館

座長：高橋 貴（愛知大学 大学院国際コミュニケーション研究科）

今、大学博物館には、大学における教育・研究成果の社会への公開・還元、博物館活動としての展示製作、地域社会との連携、新たな研究領域の開拓等、さまざまな可能性が期待されている。そうした期待に答えていかなければならないが、他方、大学博物館が大学の一機関である以上、その第一義的な役割は学生への教育実践に求められるべきであろう。

本セッションでは、名古屋大学、南山大学、九州産業大学における特色ある博物館活動の実践例をベースとして、大学博物館が大学教育にどのように関わられるか、考えてみたい。

## 1

### 大学教育と大学博物館—南山大学人類学博物館の現状と展望

報告者：黒沢 浩（南山大学 人文学部）

南山大学人類学博物館は、その創設時点を前身である人類学研究所附属陳列室に求めれば、実に60年を超える歴史を持つ博物館である。その後、人類学研究所とは分かれて、専ら収集された人類学・考古学資料の展示と考古学的調査研究、そして学芸員の養成に力を注いできたといえる。

しかし、従来の活動が内向きであったことは否めず、収蔵資料の価値は高いのに、発信力が弱かった。そのため、資料価値のゆえに学外ではよく知られ、逆に学内での知名度がきわめて低いという「ねじれ」を引き起こしていた。

そうした人類学博物館も近年では学生・一般に向けて様々な活動を展開すると同時に、名城大学附属高校とも連携して授業を行うなど、教育活動に軸足を移しつつある。さらに、2013年には人類学博物館のリニューアルも決定している。こうした状況において、今、大学博物館のあり方についても考えをめぐらせたい。

## 2

### 大学教育と大学博物館 —名大博物館の現状と課題—

報告者：吉田 英一（名古屋大学 博物館）

名古屋大学博物館は2000年に創設されて以来、大学における教育研究施設として、学部授業や学芸員資格取得のための博物館実習、大学の研究成果に関する展示の他、次世代教育の一環として地域社会や科学館と連携したさまざまな野外活動などを行ってきた。それらの成果として、近年では年間2万人を超える来館者や施設利用者がある一方で、在学生に関しては必ずしも積極的に利用されるには至っていないのが実状である。そのような中で、最近、学生が自らサイエンスコミュニケーションに関するサークルを立ち上げ、博物館を積極的に活用しようとする動きも顕われてきた。

フォーラムではそのような事例を通して、大学教育における大学博物館の現在進行形の取り組みについて紹介したい。

大学博物館と大学教育の接点は学芸員養成課程にあります。その養成課程が平成24年度から大きく変わります。必要な単位数が現行の12単位から19単位へと増加。国は「博物館のよき理解者・支援者の養成の場とともに、汎用性のある基礎的な知識の修得の場の確立」として大学博物館での教育を重要視しています。

今回は九州産業大学美術館が取り組む新時代の学芸員養成の方策（地域貢献の視点、キャリア教育の視点、大学連携の視点）を紹介し、大学博物館がどのような視点で大学教育の中で役割を果たしていけばいいのか、その方向性を検討します。





# 大学におけるキャリア教育の 課題と可能性

司 会：夏目 達也（名古屋大学 高等教育研究センター）

経済不況の中で、学生の就職問題が改めてクローズアップされています。卒業しても就職先がないという状況は、学生だけでなく社会にとっても深刻です。従来から、各大学とも就職に向けた支援を行ってきましたが、現在の状況はより適切な指導・支援を必要としています。しかし、何をすれば適切といえるのかという問に対する答えは容易に得られません。就職問題に関しては、大学としてできることはある程度限られています。その中で、大学の教職員は何ができるのか、すべきなののかについて考えます。

この問題に以前から取り組んでいる3人の教職員をお招きします。飯吉弘子氏からは、企業側の求める人間像について言及しつつ、学生がキャリアを主体的に構築するために必要な課題について提起していただきます。犬飼齊氏からは、論理的思考力や人間力を形成するうえで必要な課題について、キャリアセンター職員としての現場経験をふまえてお話しいただきます。加藤容子氏からは、従来は就職には不利な扱いを受けることの多かった女子学生にはどのようなキャリア形成支援が必要なのか、男子学生に対するキャリア教育とどのように異なるのかについてをお話しいただきます。

## 1

### 大学のキャリア教育の可能性 —経済界が求める人間像と大学が目指す教育

パネリスト：飯吉 弘子（大阪市立大学 大学教育研究センター）

グローバル化と知識経済化が急速に進む21世紀社会に求められる人間像を見極める1つの手がかりとして、経済界が求める人間像の変化と現在の方向性を確認する。その上で、それを越えたより幅広い視点から、21世紀社会において質の高い人生を生き抜きつつより良い社会を構築していける人間像やそのような個人に求められる能力資質や姿勢を考える。また、その育成において大学が担うべき責務と、大学が自らの資源を最大限に活用して展開できる大学ならではのキャリア教育のあり方を考えたい。なかでも、人生・キャリアの主体的構築において今後一層重要になる、「自ら学び、そこで得た知識やスキルや経験等を統合しながら、自ら取り組むべき課題を見極め、考え続け、多様な他者と協働していける力や姿勢」の構築に寄与する教育の可能性を考えてみたい。

## 2

### キャリアセンターが取り組む学生支援の限界 ～正課・正課外の融合した取組の必要性～

パネリスト：犬飼 斉（名城大学 キャリアセンター）

昨今の厳しい就職環境の中、多くの学生が内定獲得に苦戦しています。

キャリアセンターでは、学生たちの不安を取り除き、準備万端の状態では自信を持って就職活動ができるよう支援をしています。殆ど手を尽くしている状況です。課題は、キャリアセンターの支援に強制力がないこと。学生支援の時間が限られていることです。企業の方は、論理思考や人間力を求めてきます。この力は、一朝一夕で身に付きません。だからこそ、身につけた時には、就職後の成功に繋がっていくでしょう。キャリアセンターは、表層的支援（ノウハウ支援）に効果を発揮しますが、真に力を付けるためには、大学の「正課・正課外の融合した取組」が鍵となります。

## 3

### ライフキャリアを視野に入れた女子学生の支援

パネリスト：加藤 容子（椋山女学園大学 人間関係学部）

女子学生がキャリアをデザインするときには、職業キャリアのみではなく、家庭や地域でのキャリアを含めた、複数領域での複数キャリアを考慮に入れることが多い。そこには、学生の「仕事もそれ以外の生活も充実したい」という人生に対する豊かな意思が見受けられる。

しかし、実際の労働市場や社会状況における困難さ、また性役割に関する固定的な考え方の提示によって、学生の不安が高まり能動的なキャリア選択がなされない場合もある。

そのような中であって、大学教育ではどのような支援ができるだろうか。複数キャリア間のバランスや人生における位置づけ、その選択における柔軟性や自立性などを提案し、今後の教育のあり方について議論したい。



# MEMO

A series of horizontal dashed lines for writing a memo.

# MEMO

A series of horizontal dashed lines for writing.



# MEMO

A series of horizontal dashed lines for writing.

## 大学教育改革フォーラム in 東海 2011 プログラム

2011年3月12日 発行

大学教育改革フォーラム in 東海 2011 実行委員会

FD・SDコンソーシアム名古屋

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tf2011/>

